



世界中のオーケストラに愛されながら、  
なおも高みを目指すマエストロ

伝統と格式を誇るオーケストラから届く  
ブロムシュテット賛

昨年11月、NHK音楽祭でブラームスの大曲《ドイツ・レクイエム》を披露し、祈りの情趣に寄り添った。かつてカペルマイスターを務めたライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と、友人も多いウィーン楽友協会合唱団がパートナーだった。

今年4月、NHK交響楽団の定期公演でベルワルド、バルリオーズ、ベートーヴェンに腕を揮った。ピアニスト、マリア・ジョアン・ピレシュとの交歓を思い出す。

7月11日、オーケストラ芸術の使徒ヘルベルト・ブロムシュテットは91歳を祝った。数日後、マエストロは米タングルウッド音楽祭に出演し、ボストン交響楽団とモーツァルトの《交響曲第34番》、今年生誕100年を寿ぐバーンスタインの《フルートとオーケストラのための「ハリル」》、それにハイドン晩年の逸品《ネルソン・ミサ》を奏でた。ハ長調～変ニ長調～ニ短調／ニ長調を迎える美しいプログラム。60数年前の夏、タングルウッド（パークシャー音楽センター）でバーンスタインのレッスンを受けたブロムシュテットにとっても、ひととき感慨深いステージだったようである。

伝統と格式を誇るオーケストラからの招聘が絶えない。80歳を迎えてからはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と「恋に落ちた」。この言葉をマエストロからも、ウィーン・フィルの元楽団長でヴァイオリン奏者だったヘルスベルク博士からも聞いた。

今月のマエストロ

ヘルベルト・ブロムシュテット

Herbert Blomstedt

文◎奥田佳道

Yoshimichi Okuda

アムステルダムのロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団もブロムシュテット賛では負けていない。

88歳のときに、こう話してくれた。

「この頃は、ベートーヴェン、ブルックナー、ブラームスを指揮してほしいとよく言われます。私もそれを望んでいます、いっぽうでマーラーを指揮したい気持ちもあります。北欧の交響曲やチャイコフスキーも愛しています。ステンハンマルやベルワルドを、私のヴァージョンで皆さまにご紹介しなくては。バッハ、ハイドン、モーツァルトは、ずっと私とともにあります」。(ベルワルドの《交響曲第3番》は今年4月のN響定期公演に続き、9月のウィーン・フィル定期公演の前半を彩った)

## 91歳の名匠が届ける 彩りにあふれたプログラム

ブロムシュテットは名声に甘えない。芸術的な好奇心に探究心は増すばかりだ。スウェーデンの作曲家ステンハンマルについては2014年のインタビューで「ベートーヴェン作品との相性がいいのです」と熱く語っていた。

「後期ロマン派から出発したステンハンマルは、ベートーヴェンの音楽を愛し、とくに動機(モチーフ)の展開に魅了されていました。ピアニストとしても共感できる場所があったでしょう」。

91歳の名匠が相愛のウィーン古典派、十八番のステンハンマル、ブルックナーが神に捧げた最後の交響曲、マーラー若き日の肖像たる交響

曲を携え、6か月ぶりにN響定期公演の指揮台に立つ。ステンハンマルの《交響曲第2番》と《巨人》はN響定期ではなんと初披露となる。

ブロムシュテットは愛されている。こんな指揮者がほかにいるだろうか。

[おくだ よしみち／音楽評論家]

## プロフィール

しんし  
真摯な芸術観で楽曲に寄り添い、演奏の喜びをオーケストラ、聴き手と分かち合うマエストロ。今年4月に続く登場だ。

1927年7月、アメリカ・マサチューセッツ州に生まれ、両親の母国であるスウェーデンのほか、ザルツブルク、ジュリアード音楽学校、タングルウッド音楽祭などで学ぶ。これまでにスウェーデンのノールショピング交響楽団、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、デンマーク放送交響楽団、スウェーデン放送交響楽団、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団、北ドイツ放送交響楽団の首席指揮者、サンフランシスコ交響楽団の音楽監督、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の第19代ゲヴァントハウス・カペルマイスターを歴任。近年はアムステルダムのロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、パリ管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とも深い絆で結ばれている。華やかなキャリアに甘えず研究熱心で好奇心も旺盛だ。

NHK交響楽団とは1981年11月に初共演。1986年に名誉指揮者、2016年には桂冠名誉指揮者に就任しNHK放送文化賞も受賞した。名誉称号は、前述のいくつかのオーケストラのほかバンベルク交響楽団からも授与されている。

2018年4月、旭日中綬章を受章した。[奥田佳道]



N響ホームページでは、ヘルベルト・ブロムシュテットが10月Aプロの魅力を語るインタビュー動画をご覧ください

## PROGRAM

A

第1894回

NHKホール

10/13 土 6:00pm

10/14 日 3:00pm

指揮 | ヘルベルト・ブロムシュテット | 指揮者プロフィールはp.4

コンサートマスター | ライナー・キュッヒル

## モーツァルト

交響曲 第38番 二長調 K.504

「プラハ」[28']

I アダージョーアレグロ

II アンダンテ

III プレスト

——休憩——

## ブルックナー

交響曲 第9番 二短調(コールス校訂版)

[64']

I おごそかに、神秘的に

II スケルツォ: 活発に、生き生きと トリオ: 速く

III アダージョ: ゆっくりと、おごそかに

## Program Notes | 樋口隆一

アントン・ブルックナー(1824~1896)は、彼の最後の作品となった《交響曲第9番》を「愛する神」に捧げるつもりだったという。終楽章が未完に終わったため、第3楽章アダージョで終わるこの作品は、まさに彼の究極のメッセージだ。それに先立つモーツァルト(1756~1791)の《交響曲第38番「プラハ」》も、メヌエットのない3楽章構成。二長調と二短調の2曲の傑作を並べたブロムシュテットのプログラミングの妙を楽しみたい。

## モーツァルト

## 交響曲 第38番 二長調 K.504「プラハ」

3楽章からなるために「メヌエットなし」とも呼ばれるこの交響曲を、モーツァルトは1786年末にウィーンで作曲し、自筆の作品目録には「12月6日」の日付と共に書き込んでいる。この年の5月に初演された《歌劇「フィガロの結婚」》は、その根底にある「貴族批判」のためにウィーンでは成功しなかったが、ボヘミアの都プラハでは大成功を収めた。

そこでモーツァルトは翌1787年1月8日、妻のコンスタンツェらと共にプラハへの旅行に出かける。プラハでのモーツァルトは《フィガロの結婚》をみずから指揮したほか、1月19日に国民劇場でこの交響曲を演奏している。この作品が「プラハ」の名で呼ばれるのには、こうした事情がある。しかし、このときが初演であったかどうかは定かではない。むしろ待降節にウィーンでの予約演奏会において、すでに初演されていた可能性がある。

ソナタ形式の第1楽章は、アダージョの劇的な序奏によって幕が開けられ、シンコーペーションのリズムが特徴的なニ長調の第1主題が登場する。第2主題はイ長調の優雅な旋律。展開部が主題の対位法的処理によって深遠な世界を見せたあと、ふたたびシンコーペーションのリズムが再現部を告げている。

アンダンテの第2楽章もソナタ形式。ト長調、6/8拍子の第1主題はまさにモーツァルトの独壇場ともいえる美しい旋律。ホ短調の間奏を経て現れる第2主題もニ長調のしなやかな旋律だが、拍子の裏から入ることによって、第1主題との対照性が計られている。大胆な転調が続く展開部など、変化と驚きに満ちた緩徐楽章である。

第3楽章プレストは、《フィガロ》第2幕のスザンナとケルビーノの早口の対話を思わせるニ長調2/4拍子の弾けるような第1主題が支配するロンド・ソナタ形式で書かれている。イ長調の第2主題も、弦と管の対話が楽しい。そしてつばら第1主題を素材とした展開部からは息をもつかせぬ盛り上がりで、一気に曲が締めくくられる。

作曲年代	1786年12月6日完成
初演	1786年12月ウィーンでの予約演奏会または、1787年1月19日、プラハ国民劇場でのモーツァルト演奏会
楽器編成	フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

## ブルックナー

### 交響曲 第9番 ニ短調 (コールス校訂版)

ブルックナーが《交響曲第9番》の作曲に着手したのは1887年8月12日のことだった。大作となった《第8番》の第1稿を完成させ、意気揚々と《第9番》の作曲に取りかかったものの、指揮者のレヴィに《第8番》の改作を進言され、すっかり自信を失った彼は、まず《第8番》を同年10月中旬から1890年3月10日まで大幅に改訂し、ようやく《第9番》に本格的に着手したのは、1891年4月のことだった。そして第3楽章までが完成したのは1894年11月30日だった。第4楽章に着手したのは1895年5月24日だったが、1896年10月11日、最終楽章未完のまま巨匠は世を去り、遺言に従って、遺骸はザンクトフローリアン修道院教会の地下納骨堂の、しかも大オルガンの真下に安置された。

第1楽章は「おごそかに、神秘的に」と表示された大規模なソナタ形式の楽章で、3つの主題が用いられている。弦のトレモロによる「ブルックナー開始」で始まる序奏は、ホ

ルンによる憂愁に満ちた3度の動機から、突然、力強いファンファーレへと発展する。寄せては返す高潮の末に、全オーケストラが*fff*で奏する巨大な第1主題が登場する。ふたたび静まりかえったあと、イ長調4/4拍子の叙情的な第2主題が登場するが、対位法的に絡み合う弦の魅力が美しい。モデラートと書かれた第3主題は、ニ短調2/2拍子の悲しい旋律だが、そこから発展する幅広いエピソードによってやや救われる。展開部では、この世ならぬ響きの中で序奏主題が現れ、ファンファーレは2回も示され、長い間奏ののち、第1主題が闘争的に反復される。ブルックナーは、展開部と再現部を一体化して圧倒的な高揚をもたらしている。驚くべき緊迫感が去り、静寂が訪れるとコードが始まり、長いクレシェンドの果てに、弦のトレモロと金管の咆哮で楽章を終える。

第2楽章はスケルツォである。3/4拍子のスケルツォ主部は、異常な高まりを見せ、中間部のトリオも、通例と異なり、嬰へ長調、3/8拍子の速い楽想で疾走するように始まるが、その帰結としての副主題の詠嘆が、それゆえにこそ心を打つ。スケルツォが再現され、楽章にシンメトリーが与えられる。

「ゆっくりと、おごそかに」と表示された第3楽章のアダージョは、展開部と再現部が一体となったきわめて自由なソナタ形式として構成され、主題は3つ用いられている。第1ヴァイオリンのみの強奏によって開始される第1主題は、いきなり短9度の跳躍で始まる旋律だが、主調のホ長調を求めて浮遊する半音階的な上昇が印象的だ。冒頭動機に基づいた高揚が続き、トランペットとティンパニの炸裂が、最初の頂点を形作る。推移部ではホルンとワーグナー・チューバによるコラル的な動機が吹かれるが、ブルックナー自身はこの動機を「生からの別れ」と呼んでいたという。変イ長調の第2主題（歌謡主題）は、弦による感動的な旋律で、寂寥と愛着が遙かな過去への想いを語るかのようだ。一転して変ト長調の動きのある第3主題は、ヴァイオリンによる装飾的な音型を重ねながら、高く飛翔を始める。総休止を経て第1主題が登場すると、そこからが展開再現部といえる。第1主題は対位法的な処理が施され、一層神秘的な高揚を遂げる。ふたたび総休止を経て、こんどは第3主題がゆっくりと演奏される。第2主題が満を持してゆっくりと再現されると、フルートで《ミサ曲ニ短調》の「ミゼレーレ（憐れみたまえ）」の動機が回想される。コードでは、ふたたび「ミゼレーレ」の回想もあり、《交響曲第8番》のアダージョや、《第7番》の主要主題を回想しながら、ホ長調の澄みきった3和音が長く延ばされて、ブルックナーの「白鳥の歌」は消えてゆく。

作曲年代	1887年8月12日～1894年11月30日（第1～第3楽章）、1895年5月24日、第4楽章に着手したが、作曲者の死により未完に終わった
初演	1903年2月11日、ウィーンにてフェルディナント・レーヴェ指揮ウィーン・コンツェルトフェライン管弦楽団によって
楽器編成	フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン8（ワーグナー・チューバ4）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、弦楽

B

第1896回

サントリーホール

10/24 水 7:00pm

10/25 木 7:00pm

指揮 | ヘルベルト・ブロムシュテット | 指揮者プロフィールはp.4

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

## ベートーヴェン

交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」  
[40']

- I 田舎に着いたときに、人々の心に生まれる心地よく朗らかな気持ち：アレグロ・マ・ノン・トロポ  
 II 小川のほとり：アンダンテ・モルト・モート  
 III 田舎の人々の楽しいつどい：アレグロ  
 IV 雷と嵐：アレグロ  
 V 牧歌 嵐のあとの神への感謝に満ちた、寛大な気持ち：アレグレット

——休憩——

## ステンハンマル

## 交響曲 第2番 ト短調 作品34 [46']

- I アレグロ・エネルジコ  
 II アンダンテ  
 III スケルツォ：アレグロ、マ・ノン・トロポ・プレスト  
 IV 終曲：ソステヌート—アレグロ・ヴィヴァーチェ

## Program Notes | 柴辻純子

スウェーデンの作曲家ウィルヘルム・エウシェン・ステンハンマル(1871~1927)の《交響曲第2番》は、直接的な描写はないものの、それは彼の心に浮かぶスカンジナビアの風景だ。一方、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770~1827)の《交響曲第6番「田園」》は、きわめて精緻に作られた音楽が自然の情景を見事に描き出す。

## ベートーヴェン

## 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68「田園」

自然をこよなく愛したベートーヴェンは散歩を日課とし、心の寄りどころとしていた。本作では、自然の情景と結びついた標題的な要素が音楽に採り入れられ、ベートーヴェンはそれを、聴き手の想像力を刺激するきっかけと考えていた。楽譜には「田園交響曲、あるいは田舎での生活の思い出。音画というよりも感情の表出」と記され、音楽

による自然の描写ではなく、感情の表現であることを強調した。これは、シュトゥットガルトの宮廷楽長だったユスティン・ハインリヒ・クネヒト(1752～1817)の《交響曲「自然の音楽的描写」》(1784)が、当時人気を集めていたので(クネヒトの交響曲も5楽章構成だった)、ベートーヴェンは、自分の交響曲は流行の作曲家のものとは違う、という思いをその言葉に込めたかったのかもしれない。

**第1楽章〈田舎に着いたときに、人々の心に生まれる心地よく朗らかな気持ち〉** アレグロ・マ・ノン・トロppo、ヘ長調、2/4拍子。ソナタ形式。ヴァイオリンの穏やかな第1主題で曲は始まる。4小節目のフェルマータが効果的で、楽章タイトルの晴れやかな気持ちのまま、深呼吸するかのようだ。なだらかな第2主題とともに爽やかな気分が広がる。

**第2楽章〈小川のほとり〉** アンダンテ・モルト・モート、変ロ長調、12/8拍子。ソナタ形式。澄んだ小川のせせらぎを思わせるヴァイオリンの第1主題が美しい。最後のコーダではナイチンゲール(フルート)、ウズラ(オーボエ)、カッコウ(クラリネット)の声が模倣される。

**第3楽章〈田舎の人々の楽しいつどい〉** アレグロ、ヘ長調、3/4拍子。軽やかな3拍子の主部と民俗舞曲風の活発なトリオ(変ロ長調、2/4拍子)が交替するスケルツォ楽章。この楽章から終楽章まで、後半は切れ目なく演奏される。

**第4楽章〈雷と嵐〉** アレグロ、ヘ短調、4/4拍子。遠くで雷鳴が鳴り響き、近づく嵐の様子が克明に描かれる。この楽章で初めてトロンボーンとピッコロ、ティンパニが加わる。

**第5楽章〈牧歌 嵐のあとの神への感謝に満ちた、寛大な気持ち〉** アレグレット、ヘ長調、6/8拍子。ロンド形式。嵐が去った後の情景。開始のクラリネットとホルンの牧歌的な旋律は、アルペンホルンの響きを模したとも言われる。そこからロンド主題が導き出され、新しい主題をはさみ展開する。最後は強奏の和音で締めくくられるが、そこまで弱音で静かに進められるのは、古典派の交響曲としては、珍しい終わり方である。

本日の演奏ではパーレンライター版が使用される。

作曲年代	1807年暮れ～1808年8月、ウィーン
初演	1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場にて、作曲家自身の指揮による
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ2、弦楽

## ステンハンマル

### 交響曲 第2番 ト短調 作品34

スウェーデンのステンハンマルは、音楽院に在籍せず、ストックホルムとベルリンで私的な音楽教育を受けただけだった。才能豊かな彼は、1894年にベルリンで自作の《ピアノ協奏曲第1番》の初演で自らピアノを弾いて注目を集め、ベートーヴェンのソナタを得意とするコンサートピアニストとして活躍した。また、長年にわたって王立歌劇場やエーテボリ

交響楽団の指揮者を務め、作曲家としても数多くの作品を残し、後期ドイツ・ロマン派の影響を受けた音楽を書いてきた。

ステンハンマルの代表作《交響曲第2番》は、1911年にイタリアを旅行中にローマのボルゲーゼでスケッチが開始された。作曲は順調に進んだが、そこに至るまでの道のりは長かった。その10年ほど前に発表した《交響曲第1番》(1902～1903)は、自ら「牧歌的なブルックナー」と呼んだように、6本のホルンを含む大作だったが、初演直後に聴いたシベリウス《交響曲第2番》(1901～1902)に衝撃を受け、《第1番》を撤回した(そのため生前、楽譜は未出版だった)。その後しばらくオーケストラ曲の作曲から離れるが、1910年にデンマークの作曲家ニルセンの《交響曲第1番》を指揮したことをきっかけに、「北欧の作曲家」として作曲する方向を探り始める。民謡の引用や民俗舞曲のリズムを採り入れるだけでなく、対位法の勉強を一から始めるなど、伝統的な作曲技法を身に着けることで独自の作曲方法を編み出そうとした。

全体は伝統的な4楽章構成で、ト短調となっているが、ト音を開始音とするドリア旋法(教会旋法的一种)に基づく音階が使われ、半音階進行が意識的に避けられている。

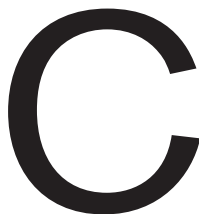
**第1楽章** アレグロ・エネルジコ、3/4拍子。ソナタ形式。古い民謡を思わせる力強い第1主題がユニゾンで示され、高音の管楽器の動機が軽やかに応える。この動機はその後もさまざまな楽器に現れ、第2主題は大らかでどこか懐かしい。展開部は、オーボエ・ソロに導かれて次第に熱を帯び、静かなファゴットから再現部へと向かう。長大なコーダはロマンチックに盛り上がり、最後はト長調の主和音で結ばれる。

**第2楽章** アンダンテ、2/2拍子。厳かな緩徐楽章。弦楽器の落ち着いた主題から始まり、哀しみの表情を見せたり、葬送行進曲のように重たいリズムが反復されるなど、音楽は波打ちながら高まる。

**第3楽章** スケルツォ：アレグロ、マ・ノン・トロppo・プレスト、3/4拍子。主部は、強弱の対比が明快なドラマチックな舞曲。牧歌的な中間部は管楽器が活躍する。

**第4楽章** 終曲：ソステヌート、4/4拍子—アレグロ・ヴィヴァーチェ、2/2拍子。全曲で最も規模が大きく、個性的な楽章。ゆるやかな序奏は、第2主題に由来する旋律が広がり、主部ではまず、弦楽器から明るくさっぱりとした第1主題によるフーガが始まる。情熱的な高まりから全休止を経て、今度はクラリネットから穏やかな第2主題によるフーガとなる。低弦のピチカートで始まるフーガも第2主題をもとにしたもので、さらに第1主題のフーガも加わる。歌謡的な部分も含みながら、対位法研究の成果が存分に発揮される。

作曲年代	1911～1915年
初演	1915年4月22日、エーテポリ音楽祭にて、作曲家自身の指揮による
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽



第1895回

NHKホール

10/19 金 7:00pm

10/20 土 3:00pm

指揮 | ヘルベルト・ブロムシュテット | 指揮者プロフィールはp.4

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

C

19 &amp; 20 OCT. 2018

## ハイドン

交響曲 第104番 二長調 Hob.I-104  
「ロンドン」[30']

- I アダージョーアレグロ
- II アンダンテ
- III メヌエット：アレグロートリオ
- IV 終曲：スピリトソ

——休憩——

## マーラー

## 交響曲 第1番 二長調「巨人」[55']

- I ゆっくりと、引きずるように、自然音のように
- II 力強い動きをもって、しかし速すぎずに
- III 厳粛に悠然と、引きずらずに
- IV 嵐のように速く

## Program Notes | 山本まり子

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)の《交響曲第104番》は、ロンドンにおける商業的音楽文化の成立を背景に作曲された。音楽を商業の対象とする傾向は19世紀に入ると大陸にも影響を与えたが、ベートーヴェン、ブラームスらは交響曲そのもののあり方を模索し続けた。こうした19世紀の経済的・文化的発展の中で、交響曲に最後の輝きを与えたのがグスタフ・マーラー(1860～1911)であろう。今回演奏される2作品から、交響曲史100年の時代精神が聞こえてくるに違いない。

## ハイドン

## 交響曲 第104番 二長調 Hob.I-104「ロンドン」

ハイドンは40年近くにわたり、旺盛な探求心と独創的精神をもって交響曲を作曲した。その変遷はジャンル自体の成熟過程を表している。

1790年、エステルハージ侯爵の死去によって29年間の宮仕えを終えたハイドンは、

ロンドンでコンサートを主宰していたザロモンの誘いに乗って海を渡った。市民層に音楽が定着し、楽譜出版やコンサートなどの経済活動も活発だったロンドン。ザロモンのオーケストラは充実した陣容を誇っており、すでに確固たる人気と名声を獲得していたハイドンは思う存分腕を振るうことができた。

この時代の12の交響曲は主題の処理と楽器法において、それまでの作品の総決算ともいうべき所産であり、《第104番》はその終着点に位置する。「ロンドン」という呼び名は後につけられた愛称で、作曲地を表す以外の意味はない。

**第1楽章** ニ短調、4/4拍子の荘重な序奏(アダージョ)から、ニ長調、2/2拍子の主部(アレグロ)へと続くソナタ形式の楽章。提示部第1主題は、イ長調へ転調すると木管楽器によって展開的に扱われ、弦楽器とフルートの第2主題へと続く。展開部では主に第1主題のリズム動機が使われ、定石通りに主調で各主題が再現される。

**第2楽章** 3部形式(アンダンテ)、2/4拍子。穏やかな表情を見せるト長調の主部に対し、中間部は一転してト短調で劇的な色合いを見せる。

**第3楽章** メヌエツト、3/4拍子。舞曲に由来するはずのメヌエツトがアレグロで書かれている。ニ長調のメヌエツト部分と、変ロ長調で始まり木管が活躍するトリオからなる。

**第4楽章** ニ長調、2/2拍子。「スピリトソ(機知をもって)」と書かれたソナタ形式のフィナーレ。持続低音の上で奏される民謡調の第1主題、弦とファゴットによるカノン風の第2主題が展開部でも順に扱われ、最後は第1主題で華やかに締めくくられる。

作曲年代	1795年
初演	1795年5月4日の慈善コンサート、ロンドン
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

## マーラー

### 交響曲 第1番 ニ長調「巨人」

今では交響曲の作曲家としてゆるぎない地位を築いているマーラーであるが、ウィーン音楽院を卒業してからの彼は、食いぶちを得るために小規模のオペラ劇場でピアニスト兼指揮者としてがむしゃらに働いた。学生時代に挑戦して幻に終わったオペラ3作をはじめ、最初期から歌曲や《嘆きの歌》などの声楽つきの作品に対する志向が顕著だったマーラー。オペラを指揮する日々において、音楽に寄り添う「言葉」に執着するのも当然の成り行きであり、そのこだわりがあらゆる創作活動の原点になったとも言えよう。交響曲を意図して書いた全5楽章の「2部からなる交響詩」もその例外ではなかった。

マーラーが1884年に着手した「交響詩」は、自作品のコラージュのような性格を持っていた。歌手ヨハンナ・リヒターへの片思いから生まれた《さすらう若者の歌》の一部、

カッセルで指揮したヴィクトル・ネスラーの《歌劇「ゼッキンゲンのラッパ手」》と同じ台本に自ら付けた旋律の一部、過去に作曲した《嘆きの歌》のフレーズや初期歌曲の要素が、作品の骨組みを作るために集められているのである。指揮活動の合間にこうして積み上げられた「交響詩」は1889年11月20日、ブタペストで初演された。

初演での聴衆の反応は芳しくなかった。1893年10月27日、ハンブルクで2度目の演奏のチャンスを得たマーラーは、タイトルを『「巨人」、交響曲形式による音詩』に変更すると同時に詳細な説明を加えた。第1部の標題は「青春の日々より―花、果実、いばらの曲」とし、〈花の章(ブルミネ)〉を挟んで現行の第1・2楽章を、第2部の「人間喜劇」には現行の第3・4楽章を置いた。これは好評だったが、続クワイマールでは物議を呼び、嫌気のさしたマーラーは、1896年3月16日にベルリンで行われた演奏会に際して標題をすべて撤回、〈花の章〉は削除、全体タイトルを「大管弦楽のための4楽章からなる交響曲 ニ長調」に変えてしまった。これこそが《交響曲第1番》である。もっとも《第1番》と番号が付いたのは、3年後の楽譜出版の時であったが。

マーラーは、ジャン・パウルの著作に基づくタイトルや言葉による説明が聴衆の音楽理解に役立つと信じたのだが、実際には誤解を招く原因だと気づいたと述べている。とはいえ、《交響曲第2番》以降でも同じように標題の付与と削除が繰り返された事実は、試行錯誤の過程そのものがマーラーの創作の特質を表しているのだろう。

**第1楽章** ゆっくりと、引きずるように、自然音のように、ニ長調、4/4拍子。長い導入部では、弦楽器が茫漠とした響きを奏でるなか、ファンファーレや鳥の鳴き声の模写が聞こえる。主部には《さすらう若者の歌》の第2曲と同一の素材が使われている。

**第2楽章** 力強い動きをもって、しかし速すぎずに、イ長調、3/4拍子。レントラー風のリズムで進む主部と、ヘ長調の穏やかなトリオで構成される。

**第3楽章** 厳粛に悠然と、引きずらずに、ニ短調、4/4拍子。民謡《フレール・ジャック》(あるいは《マルティン兄貴》)から採られた主題がカノンで綴られる。不気味さを演出する楽器奏法が次々と使われる。

**第4楽章** 嵐のように速く、ヘ短調、2/2拍子。シンバルの一撃で始まる激動の流れは、弦楽器による叙情的な主題で救われる。やがて第1楽章が回想された後、金管の輝かしい強奏に導かれてニ長調の主和音が繰り返され、曲は堂々と結ばれる。

作曲年代	1884年頃～1888年
初演	1889年11月20日、ブタペスト、マーラー自身の指揮で
楽器編成	フルート4(ピッコロ3)、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット4(Esクラリネット2、バス・クラリネット1)、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ1、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タムタム、シンバル付大太鼓、ハープ1、弦楽

## 第二〇回

市民階級が支えた

マーラー時代のオーケストラ

シリーズ

# オーケストラの ゆくえ

現代のオーケストラをめぐる

さまざまなトピックを深掘りしていくシリーズ。

第二十回は、ヨーロッパ文化史の研究者である小宮正安さんに

現代のオーケストラのあり方を形作った

十九世紀末のオーケストラについて

語っていただきます。

小宮正安

Masayasu Komiya

### カイト管弦楽団

その昔、カイト管弦楽団というオーケストラがあった。セルジュ・チェリビダッケが長年音楽総監督を務めたミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団の前身。グスタフ・マーラーが、『交響曲第4番』と『交響曲第8番』を世界初演する際に指揮したオーケストラとしても有名だが、名称にもある「カイト」とは一体何だろう？

実は、人の名前である。フランツ・カイト(1856～1935)という人物で、西南ドイツの都市、シュトゥットガルトのピアノ製造者の息子として生まれた。この地に存在したヴュルテンベルク王国に宮廷顧問官として仕えるかわら、幼い頃から親しんだ音楽への情熱を持ち続け、大の音

楽愛好家として「カイト演奏会」なる歌とピアノの演奏会を定期的に催すようになった(そこには、父親のピアノ・メーカーの楽器の素晴らしさを人々に知ってもらい狙いもあった)。

こうして演奏会企画のノウハウを積んだところで、次にカイトが手がけたのがオーケストラの創設。結果1893年にカイト管弦楽団が産声を上げた。また1895年には「カイト・ホール」をミュンヘンの一等地に建設し、そこがオーケストラの本拠地となった。

それにしても、いくら音楽が好きであろうが、また宮廷顧問官という高い地位についていようが、オーケストラを作るだけの資金がどこにあったのだろうか？

実のところ、その点については心配無用だった。1892年に結婚(カイトにとっては2度目の

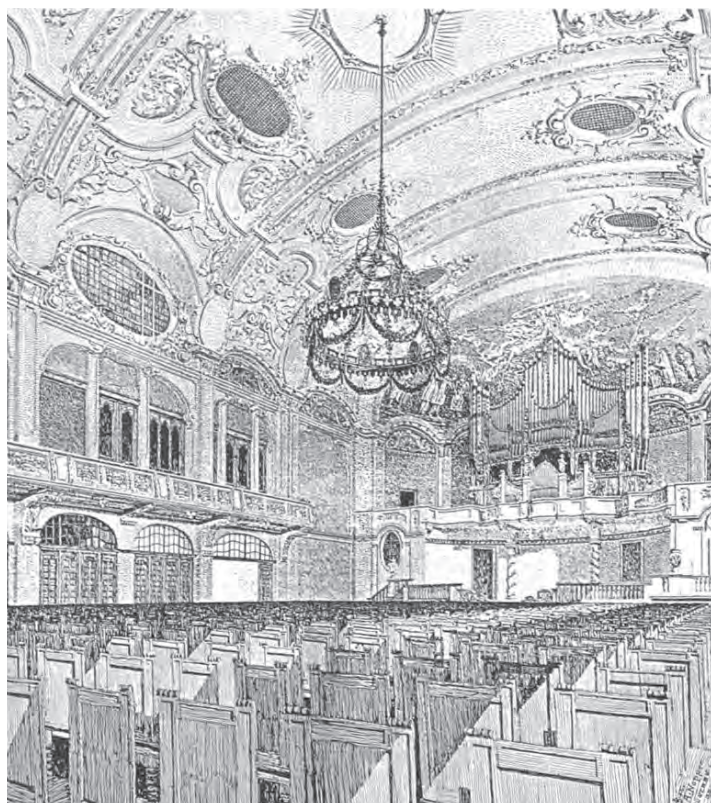
結婚した相手が、ドイツ南東部のフランケン地方の出で、ドイツ各地に代々繁栄を誇ってきた貴族、シルンディング家の娘だったからである。つまりこの結婚によって、カームは自らの経済状態を心配する必要がなくなった。結婚してからわずか1年で、彼がオーケストラを構えられたのも頷ける。

### 宮廷歌劇場管弦楽団との差別化

こうして誕生したカーム管弦楽団だが、もともとミュンヘンには別のオーケストラが存在して

いた。バイエルン宮廷歌劇場（現在のバイエルン国立歌劇場）の管弦楽団である。1556年に創設されたミュンヘンの宮廷楽団にまで遡ることができる、老舗の団体だ。

宮廷が楽団を構える。これはヨーロッパの音楽史において、けっして珍しいことではない。文化力<sup>そな</sup>を具えてこそ一流の君主、一流の国家である、という考え方が非常に強い社会背景を踏まえて、特に音楽文化の活性化を、数多の支配者が競うようにして展開した。宮廷が催すいくつもの行事、祝祭、礼拝において、宮廷楽団は音楽を通じて常に華を添え、それはやがて、豪奢<sup>ごうしゃ</sup>や贅沢<sup>ぜいたく</sup>という点で支配者の力を誇



1895年に建設されたカーム・ホール。カーム管弦楽団の本拠地であった

示するにあたってはもっとも効果的なオペラでの活動へと結実していった。

というわけでバイエルン宮廷歌劇場管弦楽団も、あくまで宮廷に属する組織であり、究極的には支配者のために演奏活動をおこなうための団体だった。しかもその活動の主たる分野は、オペラである。

いっぽうこうした状況の中で、経済的にも社会的にも力を蓄え始めた市民のために、演奏会を中心としたオーケストラが求められるようになってゆく。そんな社会的な要請を汲み取って誕生したのが、カウム管弦楽団だ。だからこそ、宮廷に属し、いきおい保守的になりがちな宮廷歌劇場管弦楽団と差別化を図るべく、野心的な試みが次々と展開された。当時の人々にとってはあまりに前衛的だったマーラーの諸作品をはじめ、ほとんど演奏されることのなかったアントン・ブルックナーの交響曲を取り上げていったのも、その現れである（だからこそ、特にチェリビダッケを音楽総監督に招いたあとのミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団も、秀でたブルックナーで演奏を展開した）。

## 過酷な要求の理由とは

いっぽうマーラーが後半生、指揮活動の中心としたのがウィーンである。彼は1897年、この街の宮廷歌劇場芸術監督に就任。翌年には、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者も務めるようになった。ただしマーラーの練習があまりに厳しく、さらにはさまざまな強権を発動したため、彼は1901年に首席指揮者としての地位を追われる（なおウィーン宮廷歌劇場芸術監督のほうは、1907年まで務めた）。

だが、なぜマーラーはそれほどまでに過酷な

要求をウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に突き付けたのか？ それは1900年、プロの演奏家を擁するもうひとつの演奏会専用オーケストラが誕生したからだ。それが、現在のウィーン交響楽団の前身にあたる、演奏協会管弦楽団。運営に当たったのは、ウィーン楽友協会だ。

ウィーン楽友協会は、市民階級を中心とするウィーンの音楽愛好家たちによって1812年に創設された音楽団体。活動の目的のひとつは、オーケストラも含む演奏会の開催だった。ただし特にオーケストラの演奏会の場合、メンバーのほとんどは楽友協会の会員＝音楽愛好家であったため、音楽的に難しい作品が増えるに至って、演奏のレベル・ダウンが懸念されてゆく。そこで、楽友協会が主催する演奏会のいわばレジデント・オーケストラとして、「演奏会協会管弦楽団」が創設された。

いっぽうのウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は、ウィーン宮廷歌劇場のメンバーから成る演奏会用オーケストラとして誕生し、1870年以降は楽友協会の新会館の大ホール「黄金のホール」を活動拠点としてはいたものの、楽友協会の専属オーケストラではなかった。普段は



1870年に建設されたウィーン楽友協会（19世紀末頃撮影）。1900年以降、ウィーン・フィルだけではなく現・ウィーン交響楽団も同ホールを本拠地とした

あくまで、黄金のホールを借りて自主的に演奏会を催し、たまに楽友協会が主催する演奏会に招かれる。

だが、1900年を境に、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団はもはや、この街唯一のプロ集団の演奏会用オーケストラとしての地位に胡坐<sup>あぐら</sup>をかいてはいられなくなった。またそれを見越してのマーラーの鬼指揮官ぶりだったのだが、それが結局は裏目に出た。

## 特権階級の時代から市民の時代へ

それにしても、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の誕生を顧みた時、そこにきわめて政治的な動機があったことは見逃せない。卓越した腕前を有しているにもかかわらず、歌劇場では舞台の下で、歌手や踊り手の伴奏者としての役割に甘んじざるをえない演奏者たち。そんな彼らが、自分たちで自主運営のオーケストラを組織し、しかも演奏会用のレパートリーを舞台上で華々しく取り上げたい、と願った結果、このオーケストラが作られたという経緯があるからだ。王侯貴族の支配下を脱し、名もなき市民が台頭し始めた19世紀のヨーロッパにふさわしいエピソードである。

しかもウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が設立された年が、1842年というのも意味深い。当時のウィーンでは、オーストリア帝国宰相のクレメンス・フォン・メッテルニヒによる保守反動体制が確立され、市民による結社の自由が大幅に制限されていたからだ。

だがそんな時代だからこそ、ウィーン宮廷歌劇場の管弦楽団員の心に火が付いたのだろう。反体制的なジャーナリストも巻き込んで、歌劇場の活動のない週末の昼間を中心に、自

主運営のオーケストラを作ってゆこうとする機運が盛り上がった。結果、あくまで政治的な目的ではなく音楽を目的とした結社であることが強調され、これには当局も最終的に首を縦に振った。こうして、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が誕生した。

音楽が、宮廷に象徴される特権階級のものから、市民のものになっていったヨーロッパ近代。そんな社会の移り変わりを如実に物語るのが、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の、さらにはカイム管弦楽団の誕生である。名実ともに市民階級が力を持った時代に活躍したマーラーが、この2つのオーケストラと深いかわりを持ったことも、けっして単なる偶然ではなかった。そしてそんなマーラー時代の新たなオーケストラの形が、現在のオーケストラのあり方へとつながってゆく。

## 文 | 小宮正安 (こみや まさやす)

横浜国立大学大学院都市イノベーション学府教授。専門はヨーロッパ文化史、ドイツ文学。著書に『コンスタンツェ・モーツァルト——「悪妻」伝説の虚実』『ヨハン・シュトラウス——ワルツ王と落日のウィーン』、訳書に『ウィーン・フィル コンサートマスターの楽屋から』など。

# Overview

## 11月定期公演

### 2人の名匠が贈る アメリカとロシア音楽の粋

11月の定期公演で指揮台に立つのは、広上  
淳一とジャンンドレア・ノセダの2人のマエストロ。

Aプロは広上淳一による20世紀アメリカ音楽  
プログラム。コーブランドの《オルガンと管弦楽の  
ための交響曲》は、後に《交響曲第1番》として改  
作されることになる若き日の意欲作。実演で聴け  
る貴重な機会となる。オルガン独奏はバッハ・コレ

ギウム・ジャパンでも活躍する鈴木優人。アイヴズ  
の《交響曲第2番》にはアメリカ民謡がふんだん  
に用いられている。激しい不協和音の連続など  
はなく、この作曲家としてはとても聴きやすい作  
品だが、最後に驚きの一撃が待っている。

Bプロは、ジャンンドレア・ノセダの指揮。メイ  
ン・プログラムはラフマニノフの《交響的舞曲》。  
華麗なオーケストレーションを誇るアメリカ時代の  
傑作だ。ハイドン《チェロ協奏曲第1番》でソロを  
弾くアルメニア出身のアフナジャリヤンは若手の  
注目株。

同じくノセダが指揮するCプロでは、ドイツと  
日本にルーツを持つアリス・紗良・オットがラヴェル  
《ピアノ協奏曲》を披露する。新世代のフレッシュ  
な感性に期待したい。プロコフィエフ《ロメオと  
ジュリエット》は、ストーリー性を重視したノセダ独  
自の抜粋によって演奏される。鮮烈かつ精彩に  
富んだプロコフィエフを堪能できるだろう。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

## A

11/24(土) 6:00pm

11/25(日) 3:00pm

NHKホール

バーバー／シェリーによる一場面のための音楽 作品7

コーブランド／オルガンと管弦楽のための交響曲

アイヴズ／交響曲 第2番

指揮：広上淳一

オルガン：鈴木優人

## B

11/14(水) 7:00pm

11/15(木) 7:00pm

サントリーホール

レスピーギ／リュートのための古風な舞曲とアリア 第1組曲

ハイドン／チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob.VIIb-1

ラフマニノフ／交響的舞曲 作品45

指揮：ジャンンドレア・ノセダ

チェロ：ナレク・アフナジャリヤン

## C

11/9(金) 7:00pm

11/10(土) 3:00pm

NHKホール

ラヴェル／ピアノ協奏曲ト長調

プロコフィエフ／バレエ組曲「ロメオとジュリエット」(抜粋)

指揮：ジャンンドレア・ノセダ

ピアノ：アリス・紗良・オット

---

**PROGRAM****A****Concert No.1894 NHK Hall****October****13(Sat) 6:00pm****14(Sun) 3:00pm**

---

conductor | **Herbert Blomstedt**concertmaster | **Rainer Küchl**

---

**Wolfgang Amadeus Mozart**  
**Symphony No.38 D major K.504**  
**“Prague” [ 28’]**

I Adagio–Allegro

II Andante

III Presto

— intermission —

**Anton Bruckner**  
**Symphony No.9 d minor (Ed. by**  
**Cohrs) [ 64’]**

I Feierlich, misterioso

II Scherzo: Bewegt, lebhaft–Trio: Schnell

III Adagio: Langsam, feierlich

---

**Artist Profile**

---

**Herbert Blomstedt, conductor**

Noble, charming, sober, modest. Such qualities may play a major role in human coexistence and are certainly appreciated. However, they are rather atypical for extraordinary personalities such as conductors. Whatever the general public's notion of a conductor may be, Herbert Blomstedt is an exception, precisely because he possesses those very qualities which seemingly have so little to do with a conductor's claim to power. The fact that he disproves the usual clichés in many respects should certainly not lead to the assumption that he does not have the power to assert his clearly defined musical goals. Anyone who has attended Herbert Blomstedt's rehearsals and experienced his concentration on the essence of the music, the precision in the phrasing of musical facts and circumstances as they appear in the score, the tenacity regarding the implementation of an aesthetic view, is likely to have been amazed at how few despotic measures were required to this end. Basically, Herbert Blomstedt has always represented that type of artist whose professional competence and natural authority make all external emphasis superfluous. His

work as a conductor is inseparably linked to his religious and human ethos, accordingly, his interpretations combine great faithfulness to the score and analytical precision, with a soulfulness that awakens the music to pulsating life. In the more than sixty years of his career, he has acquired the unrestricted respect of the musical world.

Born in the USA to Swedish parents and educated in Uppsala, New York, Darmstadt and Basel, Herbert Blomstedt gave his conducting debut in 1954 with the Stockholm Philharmonic Orchestra and subsequently served as Chief Conductor of the Oslo Philharmonic, the Swedish and Danish Radio Orchestras and the Staatskapelle Dresden. Later, he became Music Director of the San Francisco Symphony, Chief Conductor of the NDR Symphony Orchestra and Music Director of the Gewandhaus Orchestra Leipzig. His former orchestras in San Francisco, Leipzig, Copenhagen, Stockholm and Dresden as well as the Bamberg Symphony and the NHK Symphony Orchestra all honoured him with the title of Conductor Laureate.

Herbert Blomstedt holds several Honorary Doctorates, is an elected member of the Royal Swedish Music Academy and was awarded the German Federal Cross of Merit. Over the years, all leading orchestras around the globe have been fortunate to secure the services of the highly renowned Swedish conductor. At the age of over ninety, with enormous mental and physical presence, verve and artistic drive, he continues to be at the helm of all leading international orchestras.

---

**Program Notes | Akira Ishii**

---

**Wolfgang Amadeus Mozart (1756–1791)**

---

**Symphony No.38 D major K.504 “Prague”**

The “Prague” Symphony was composed in Vienna in late 1786. Its premiere took place in Prague on January 19, 1787 (the symphony may have been performed in Vienna before the premiere). The work consists of just three movements. It lacks a minuet (and trio), a dance-oriented movement that had been by the third quarter of the eighteenth century fashionable to be included in symphonies written in Austria and the other German speaking regions. The reason why Mozart did not write a minuet for the “Prague” Symphony is unknown. It might be related to the fact that the last movement of the “Prague” was composed first among the three movements of the symphony. Mozart may have intended to replace the finale of one of the symphonies he had composed earlier with the newly written movement—the composer often reused or “recycled” his symphonies for his concerts in Vienna. It is not known, however, whether the refurbished version of the earlier symphony had ever been performed, or even created.

Mozart was invited to Prague because *Le nozze di Figaro* (*The Marriage of Figaro*), the first of the three very well-known opera buffas that Mozart collaborated with Lorenzo da Ponte, saw a tremendous success there. The impresario of the Prague Opera Theater wanted the public to see the opera being conducted by the composer himself. The “Prague” Symphony was played in a concert that was intended to introduce “the famous Mozart” prior to the opera performance the composer was scheduled to direct.

Most of Mozart’s symphonies are not scored for a full-size orchestra. His well-known last three symphonies, for instance, do not call for all the wind instruments that would have been available to the composer. Only one flute, instead of two, appears in all of these three

compositions; the oboes are missing in the E-flat major symphony (No. 39), the trumpets and drums in the G-minor symphony (No. 40), and the clarinets in the C-major “Jupiter” Symphony (No. 41). The “Prague” is no exception. It calls for a pair of flutes, oboes, bassoons, French horns, trumpets, and drums and strings; the clarinets are not included. The symphony, however, is written in a grand manner, utilizing the full sound the late eighteenth-century orchestra could have produced.

**Anton Bruckner (1824–1896)**

## **Symphony No.9 d minor (Ed. by Cohrs)**

**A** Bruckner never completed Symphony No. 9. The composer died in 1896, while he was working on the last movement. The finale was nearly finished, but he struggled very much to conclude it. Several months prior to his death, he had written a countless number of sketches for the last movement of the more-than-one-hour long symphony. He, however, was never able to organize fragmental ideas into a coherent format, especially for the last portion of the movement. Bruckner eventually realized that he had become physically too weak to continue writing the finale. He then had an idea that his *Tē Deum*, a sacred choral work Bruckner had composed in the mid-1880’s, could be used to conclude the symphony when the work is performed in a concert. The composer began creating a section that would bind the incomplete symphony and the religious piece. It became apparent to Bruckner, however, that the idea was not practical, and the project was soon abandoned. When Symphony No. 9 was published by Ferdinand Löwe in 1903, the year the work premiered under Löwe’s direction in Vienna, it consisted only of three movements.

Bruckner never received formal training in writing orchestra music in his childhood nor did he grow up in surroundings where he could expose himself to the grand repertoire of a variety of symphonic compositions of the masters of the Romantic Era. He was instead educated at religious establishments to become a school teacher. Despite the circumstances Bruckner developed strong interests in composing music and wrote a few organ pieces while he was still a teenager. In his early twenties he began creating a large number of religious choral pieces. Bruckner, however, waited for a while to compose a large-scale symphonic work. It was not until the mid-1860’s that Bruckner completed the first version of his Symphony No. 1. He was then already over forty-years old.

Bruckner’s instrumentation of Symphony No. 9 is rather conservative. It calls for three each of flutes, oboes, clarinets, and bassoons with eight French horns (of which four double on Wagner tubas), three trumpets, three trombones, contrabass tuba, a set of timpani, and strings. Except for the Wagner tubas, which create a heavenly atmosphere at the end of the symphony, the composer employs no unusual or peculiar instruments.

Symphony No. 9 is a very long composition. The first movement alone takes approximately thirty minutes. The tempo indication there—*Feierlich, misterioso* (solemn, in a mysterious manner)—reflects its dignified mood. The second movement is a scherzo and shows some influence of Beethoven’s ultra-fast rhythmically tricky music in triple meter. The Symphony ends with a glorious slow movement.

**Akira Ishii**

Professor at Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

B

Concert No.1896 **Suntory Hall****October****24(Wed) 7:00pm****25(Thu) 7:00pm**conductor | **Herbert Blomstedt** | for a profile of Herbert Blomstedt, see p.38concertmaster | **Ryotaro Ito****Ludwig van Beethoven****Symphony No.6 F major op.68****“Pastorale” [40’]**

- I Angenehme, heitere Empfindungen, welche bei der Ankunft auf dem Lande im Menschen erwachen: Allegro ma non troppo
- II Szene am Bach: Andante molto moto
- III Lustiges Zusammensein der Landleute: Allegro
- IV Donner, Sturm: Allegro
- V Hirtengesang, Wohltätige, mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem Sturm: Allegretto

— intermission —

**Wilhelm Eugen Stenhammar****Symphony No.2 g minor op.34 [46’]**

- I Allegro energico
- II Andante
- III Scherzo: Allegro, ma non troppo presto
- IV Finale: Sostenuto-Allegro vivace

**Program Notes | Akira Ishii****Ludwig van Beethoven (1770–1827)****Symphony No.6 F major op.68 “Pastorale”**

Beethoven completed the “Pastoral” Symphony in 1808. Its first public performance took place at a benefit concert organized by the composer himself in Vienna on December 22 of the same year. The concert consisted also of other works by Beethoven, including Piano Concerto No. 4, Op. 58, *Chor Fantasia*, Op. 80, and Symphony No. 5 in C-minor, Op. 67.

The most striking feature of the “Pastoral” Symphony is the inclusion of programmatic elements, a compositional concept that would become popular among the composers of the Romantic Era. In the “Pastoral” Symphony, Beethoven depicts his feelings towards nature. To make his intentions clear, the composer wrote at the beginning of each of the five movements the following suggestive words: for the first movement, “Pleasant, Cheerful Feelings which Awaken in Men on Arrival in the Country Side;” for the second, “Scene by the Brook;” for

B

24 &amp; 25 OCT. 2018

the third, “Jolly Gathering of Country People;” for the fourth, “Thunder, Storm;” and for the fifth, “Shepherd’s Song. Salutory Feelings with Thanks to the Deity after the Storm.” It is not difficult at all for a listener of the symphony to imagine the sceneries Beethoven wished to draw from the sound the orchestra produces. Incidentally, Walt Disney utilized a large portion of the “Pastoral” Symphony in his 1940 animated film, *Fantasia*. Not just children but adults, too, must also have enjoyed the superb collaboration between Beethoven’s music and the animated scenes, to which, according to the film, Walt Disney gave a “mythological setting.”

Symphony No. 6 is scored for an unusually large number of, from a view point of the beginning of the nineteenth century, wind instruments. Besides the usual set of woodwinds and brass instruments the symphony calls for a piccolo and two trombones.

---

**Wilhelm Eugen Stenhammar (1871–1927)**

---

## Symphony No.2 g minor op.34

Wilhelm Stenhammar, a Swedish composer, pianist, and conductor, was active mostly in Sweden in the late nineteenth and early twentieth centuries. Stenhammar was born in Stockholm where he received his first musical training. He then went to Berlin to study the piano in 1892. In 1897, Stenhammar began his career in conducting. He received an appointment as Artistic Director from the Gothenburg Symphony Orchestra in 1906. He held the position until 1922. Symphony No. 2 was composed between 1911 and 1915. It was dedicated to the Gothenburg Symphony Orchestra, which premiered the composition on April 22, 1915. The work was published in Stockholm in 1916.

Stenhammar was strongly influenced by the music of German-Austrian composers like Richard Wagner, Johannes Brahms, and Anton Bruckner. At the same time, his Swedish background also led him to have keen interests in the works of Carl Nielsen and Jean Sibelius. In comparison with that of his fellow Scandinavian composers, however, Stenhammar’s music remained conservative. By the time Stenhammar was writing Symphony No. 2, he began exploring the music of the composers of the past and had developed his own classicism. Those “classical” composers who influenced Stenhammar include Beethoven, Haydn, and Mozart. In addition, Stenhammar also studied polyphony of the Renaissance Era. In Symphony No. 2, he adopts a modal language and writes melodies based on modal themes. At the same time, Stenhammar did not forget to incorporate his Scandinavian heritage. The influence of Swedish folk music and folk-dance rhythms can be easily detected.

Stenhammar scores Symphony No. 2 rather conservatively for a composition written in the early twentieth century. It calls for a pair of flutes, oboes, clarinets, and bassoons, four French horns, two trumpets, three trombones, timpani, and five-part strings. The sound produced by this type of orchestra is essentially the same as that envisaged by Brahms or Bruckner when they were writing their symphonies a few years before Stenhammar. Symphony No. 2 consists of four clearly divided movements. The first, marked *Allegro energico*, begins with a folk-song-like tune that is played in unison by the violas, cellos, and bassoons. The second movement starts quietly, again with the violas and cellos (but this time in four parts) playing a simple, solemn melody. After the lively third movement, a complex double fugue appears in the finale. This must have been the result of Stenhammar’s studying of counterpoint prior to composing Symphony No. 2.

---

**Akira Ishii** | For a profile of Akira Ishii, see p.40

## PROGRAM

Concert No.1895 **NHK Hall****October****19(Fri) 7:00pm****20(Sat) 3:00pm**conductor | **Herbert Blomstedt** | for a profile of Herbert Blomstedt, see p.38concertmaster | **Ryotaro Ito**
**Franz Joseph Haydn**  
**Symphony No.104 D major**  
**Hob.I-104 “Londoner” [30’]**

- I Adagio-Allegro
- II Andante
- III Menuetto : Allegro-Trio
- IV Finale: Spiritoso

— intermission —

**Gustav Mahler**  
**Symphony No.1 D major “Titan”[55’]**

- I Langsam. Schleppend. Wie ein Naturlaut
- II Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell
- III Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen
- IV Stürmisch bewegt

**Program Notes | Akira Ishii****Franz Joseph Haydn (1732–1809)****Symphony No.104 D major Hob.I-104 “Londoner”**

Haydn’s Symphony No. 104 was composed in London in 1795 and premiered there on May 4 of the same year. Haydn was a very prolific composer and wrote more than one hundred symphonies during his long career, the “London” Symphony being his last. From an eighteenth-century perspective, the orchestra Haydn wanted for this composition was quite large, reflecting the active concert life of the capital city of the nation that would soon lead the world economy. The D-major symphony is scored for four-part strings and a pair of flutes, oboes, clarinets, bassoons, French horns, trumpets, and timpani. The name “London” was not provided by the composer himself. Sometime in the nineteenth century, people began calling the composition as such simply because the work was written in London. Haydn, however, did not compose just this one symphony there; the composer created altogether twelve such compositions while he was in London between 1791 and 1792 as well as between 1794 and 1795. All of these symphonies—Symphonies Nos. 93–104—are indeed “London” compositions, but Symphony No. 104 alone received the nickname.

Most symphonies Haydn wrote were for his employer and patron Prince Nikolaus I of the

**C**

19 &amp; 20, OCT. 2018

wealthy Hungarian aristocratic Esterházy family. Haydn entered the service of the Esterházy court as Vice-Kapellmeister in 1761 and later became Kapellmeister, the position he kept for nearly thirty years until Nikolaus I's death in 1790. When Prince Anton succeeded his father, Haydn's duties as Kapellmeister were significantly reduced; consequently, it became possible for him to freely travel to any place he wished. He was by then highly regarded, and many musical establishments throughout Europe wanted to invite him to give concerts. Haydn eventually chose London for the place where he would receive fame and wealth for his glorious achievements.

Symphony No. 104 opens with a slow introduction, of which the first few measures sound rather mysterious. This is partly because the entire orchestra plays just two notes—D and A. This makes the audience feel uneasy, since these two notes alone would not define whether the work is in a major or minor key. Haydn keeps the dark colored sonority until the end of the introduction, which is followed by a lively but also majestic fast section in sonata-allegro form. The slow second movement is a set of variations, and the third is a full-length Menuetto and Trio. The finale is a grand and majestic movement, which begins with a bass pedal note.

## Gustav Mahler (1860–1911)

### Symphony No.1 D major “Titan”

Mahler's Symphony No. 1 was composed between 1887 and 1888, but the idea for writing a symphonic work had been already conceived in 1884. The premiere took place in Budapest on November 20, 1889. Mahler himself conducted the Budapest Philharmonic Orchestra (Mahler was at that time the second conductor at the Leipzig Opera). The second performance of Symphony No. 1 occurred in Hamburg in October 1893. Prior to it the composer made significant revisions to the symphony, which received further alterations when it was published in 1899.

The first performance of Mahler's Symphony No. 1 was not a successful event. The audience was confused and did not know how to appreciate the composer's new creation. One of the reasons why this happened was that Mahler introduced the composition at the premiere as a symphonic poem, not a symphony. People attending the concert must have expected to hear music that would vividly depict stories or sceneries, but they were not able to experience what they wanted. Mahler had provided indicative words and phrases for each of the two parts of the symphony that once comprised altogether five movements. Part I is described as “From the days of youth, ‘youth, fruit, and thorn pieces’” and the three movements in it, as “Spring and no end. This introduction describes the awakening of nature at the earliest dawn” (the original and current first movement); “Flowerine Chapter” (the original second movement but had been discarded since 1894); and “Set with full sail” (originally the third, but currently the second). Part II was titled “Commedia umana,” and its two movements were explained as “Stranded. A funeral march in the manner of Callot” (originally the fourth, but currently the third) and “Dall’inferno al Paradiso, as the sudden expression of a deeply wounded heart” (originally the fifth, but currently the fourth). These brief titles, however, were not enough for the audience to comprehend the composition. The descriptive words were eventually dropped after the second performance of the symphony in 1893. Symphony No. 1 is a good example of compositions that display Mahler's way of incorporating pre-existing music written by him or by others. The works quoted in the symphony include Mahler's *Lieder eines fahrenden Gesellen*, *Der Trompeter von Säckingen*, *Hans und Grethe*, Franz Liszt's *Dante Symphony*, and Wagner's *Parsifal*.

**Akira Ishii** | For a profile of Akira Ishii, see p.40

ブラームス《交響曲第1番》。ケルンWDR交響楽団首席指揮者を務めるサラステにとってブラームスの交響曲は重要なレパートリーのひとつ



## 公演報告

# N響「夏」2018

7月20日、NHKホール

Summer Concert 2018

今年のN響「夏」には、フィンランドの名指揮者ユッカ・ペッカ・サラステが登場。

前半は母国を代表する作曲家シベリウスの《ヴァイオリン協奏曲》を

同じく北欧ラトヴィアのヴァイオリニスト、バイバ・スクリデとともに披露しました。

後半のブラームス《交響曲第1番》では、知性と情熱とともに携えた名演で観客を魅了しました。

シベリウス／アンダンテ・フェスティヴォ、ヴァイオリン協奏曲 二短調 作品47、ブラームス／交響曲 第1番 ハ短調 作品68



(左) 指揮を務めたユッカ・ペッカ・サラステ  
(右) シベリウス《ヴァイオリン協奏曲》で  
ヴァイオリン・ソロを務めたバイバ・スクリデ



(左)コンサートの前後にはN響メンバーも参加して「楽器体験工房」が開かれた  
(右)年に一度のオーケストラの夏祭りは金管・打楽器の華々しいファンファーレで幕開け

## 公演報告

# 夏だ！ 祭りだ！！ N響ほっとコンサート

8月5日、NHKホール

NHKSO "HOTTO" CONCERT

夏休み恒例の「N響ほっとコンサート」、

今年は「シンフォニック・スペクタクル！」をテーマに掲げ、

熊倉優指揮のもと、《スター・ウォーズ》からメシアン《トゥランガリラ交響曲》まで、

オーケストラのだいご味を味わえる20世紀の作品を集めてお贈りしました。

ジョン・ウィリアムズ／映画「スター・ウォーズ」—メイン・タイトル、プリテン／青少年の管弦楽入門（パーセルの主題による変奏曲とフーガ／ナレーションつき）、ミヨー／スカラムーシュ、ショスタコーヴィチ／交響曲 第10番 ホ短調—第2楽章、メシアン／「トゥランガリラ交響曲」—第5楽章「星たちの血の喜び」



(上)メシアン《トゥランガリラ交響曲》より第5楽章「星たちの血の喜び」。ピアノを佐野隆哉、オンド・マルトノを大矢素子が務めた

(左下)指揮を執った熊倉優とナビゲーターを務めた加藤綾子。首席指揮者バーヴォ・ヤルヴィのアシスタントを務める熊倉は、前日8月4日の川崎公演とともに今回がN響初登場となった

(中下)ミヨー《スカラムーシュ》でサクソフォン・ソロを務めた上野耕平

(右下)ほっとコンサートで初めて行われた指揮者体験コーナー





ハノイ公演終演後、満席の客席から大きな拍手を受ける井上道義(指揮)とNHK交響楽団(9月7日)

## 公演報告

# 日越外交関係樹立45周年記念 NHK交響楽団

## ベトナム公演

2018年9月5日、ホーチミン市オペラハウス(サイゴンオペラハウス)

2018年9月7日、ハノイオペラハウス

NHKSO Vietnam Tour

N響にとって創立以来初めてとなるベトナム公演が9月初旬に行われました。

フランス統治時代に建てられた歴史あるホーチミンとハノイのオペラハウスで

指揮者の井上道義、ソリストのクリスティアン・テツラフとともに

チャイコフスキーやラロの作品で熱演を繰り広げ、

満場のお客様から盛大な拍手がオーケストラに寄せられました。

チャイコフスキー／歌劇「エフゲニ・オネーギン」—ゴロネーズ、ラロ／スペイン交響曲 二短調 作品21、

チャイコフスキー／交響曲 第4番 ヘ短調 作品36、[アンコール]伊福部昭／交響譚詩—第1譚詩(抜粋)

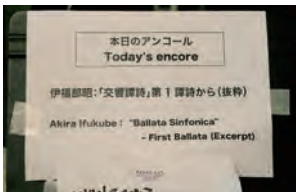
主催：NHK／NHK交響楽団、後援：外務省、協賛：ANAホールディングス株式会社、制作協力：KAJIMOTO

協力：ベトナム国立交響楽団／ホーチミン市交響楽団／ベトナム日本商工会議所／ホーチミン日本商工会議所

(左)ホーチミン公演(9月5日)の会場となった、ホーチミン市オペラハウス。1900年に完成

(中)ホーチミン公演前のリハーサルには、ホーチミン市交響楽団のメンバーや音楽学生が訪れ、真剣なまなざしで見学

(右)ホーチミン、ハノイ両公演ともに、アンコールとして、伊福部昭《交響譚詩》からの抜粋が演奏された





(左上)ハノイ公演の会場となったハノイ・オペラハウス。1911年完成  
(左下)ハノイ公演にはチャン・ダイ・クアン ベトナム社会主義共和国  
主席(当時、9月21日逝去)が来場し、今井環NHK交響楽団特別  
主幹と握手を交わした。また梅田邦夫駐ベトナム大使、本名徹次ベ  
トナム国立交響楽団音楽監督ら、日越の関係者が数多く来場した  
(右上) ホーチミン、ハノイ両公演の開演に先だって、ベトナムと日  
本の国歌が立奏された。写真はホーチミン市オペラハウスでのリ  
ハーサルの様子



(左)N響初のベトナム公演で指揮を務めた井上道義。ハノイ公演  
翌日には現地の指揮者志望者のために講習会を開くなど、献身的  
にベトナム公演の成功に尽くした  
(右) 今回の公演でソロを務めたのはドイツを代表する世界的ヴァ  
イオリニスト、クリスティアン・テツラフ。ラロ《スペイン交響曲》で  
豊かな音楽性と見事な技巧をあわせ持った演奏を披露した(いずれ  
も9月5日)